

婦女新聞

全68卷

● 婦人界35年
● 「婦女新聞」
記事・執筆者索引

● 復刻にあたって

福島四郎主宰『婦女新聞』は一九〇〇年(明治三十三年)創刊。福島四郎(一八七四—一九四五年)は

婦人論をはじめ、婦人の参政権、母性保護、女性と職業、公娼廃止等の婦人問題、

女子教育、結婚、家族論と広範囲にわたる問題を論じ、女性の人権擁護、

女性を束縛する制度、伝統的習慣からの解放を唱えた。さらに

女性の男性との対等な人格の尊重、女子が職業をもつことが男性の

人間解放につながるという主張し、公娼問題においては男子の貞操、

倫理を説いた。また同新聞の婦人界・女教員界ニースは明治・

大正・昭和にわたる婦人の生活記録であり、近代史研究にとって

貴重な一次資料である。四十三年間続いたこの新聞が昭和十七年に

廃刊される際に寄せられた各界からの讃辞は、同新聞の果たした役割の

大きさを物語っているといえよう。

しかし、この資料は四万ページという膨大なもので、現在に至るまで

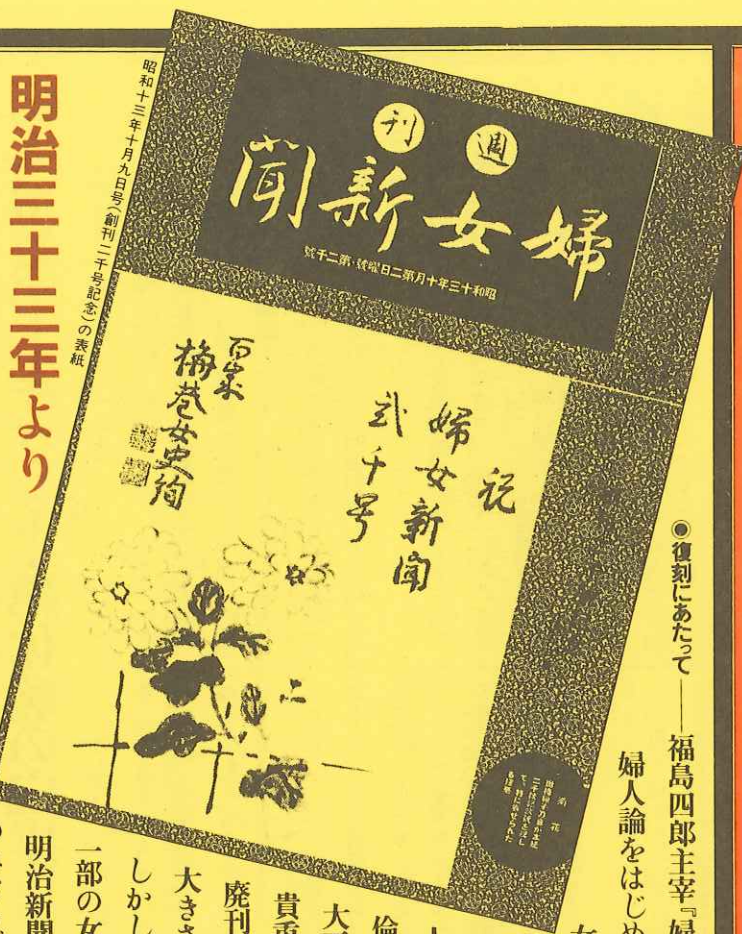
一部の女性史研究者から高く評価されながらも国会図書館、東大法学部

明治新聞雑誌文庫に埋もれた状態であった。小社では同新聞が女性史研究

のみならず近代史研究に類のない資料であることに鑑み、ここに完全な形で

復刻する。この復刻が近代史・女性史研究に新しい

礎石を築くことを願うものである——不二出版



明治三十三年より

昭和十七年まで四十二年間

刊行された女性史・婦人問題の重要資料

一番ヶ瀬康子

婦人解放のドキュメント・総体験の宝庫

人も我もあざむかりし四十年を

我が子のまえに今は誇るかな

この歌は、二〇世紀初頭から半世紀ちかくの間、女性の啓蒙誌として、『婦女新聞』を発刊しつづけた福島四郎の歌である。福島四郎は、姉の不幸な結婚から感じるところがあって、女性の地位を高めるための新聞を発行しつづけた。それが、今回復刻された『婦女新聞』である。

その中には、女子教育や女子労働、家庭生活さらには母性保護の問題などにいたるまで、女性にかかわる多面的な記事がもりこまれている。とくに母性保護については、福島四郎は、いち早く先駆的な発言をしており、それらが一つのきっかけとなって、母子保護法制定運動がおこったということは、今日多くの人々が知るところである。

児玉勝子

数十年に及ぶ婦人運動の得がたい記録

これだけ長い期間、一途に婦人問題を追いつけて来たものは他に類がない。ことに毎週冒頭の婦人界・女教界ニュースは、論文や評論と違って、事実を足で追って綴ったものだけに、ずっしりとした手ごたえがある。

しかし今まで、四三年間発刊されつづけた『婦女新聞』そして多くの人々に啓蒙的な役割をはたした『婦女新聞』の、全部を読めるチャンスは、ほとんどないといわれていた。ところが、今回、幸いにして、全部復刻刊行されるという。

このことは、女性史はもとより教育史、社会事業史にも、大きな貢献となることは、言をまたない。明治大正から昭和にいたるまでのその長い歴史において、ヒューマンでリアルな立場から、女性の地位の向上を願って書き綴られた多くの記事や論説は、まことに貴重な歴史の証言である。また、今なお、私たちへの警鐘でもあると思えるくらい、みずみずしい課題にみちている。

今回の復刻が、多くの人々の目にふれ、活用されることを期待してやまない。

創刊の明治三年は、婦人の政治活動をいっさい禁じた「集会及政社法」(明治三年公布)がさらに強化されて「治安警察法」として再公布された年である。やがて明治三八年、日露戦争末期、堺ため子、遠藤清子らによって治安警察法改正請願運動が起これ、これを起点

婦女新聞

第一號

五月十日發行

發刊の辭

大内山の松の梢に、雛鶴ひこつ數をひて、君が代の千代は、また千代を加へたり。天下の民は、いかにしてこの御歡びをのべんか。數十日の節より赤志を盡して思ひはかり、或は紀念として美術館を建て、圖書館をまうけ、或は物品を献り、祝詞をさよぐるなど、北は千島の果より、南は臺灣の新領土に至るまで、互に祝の心の上に通らざらんを恐るゝに似たり。

婦女新聞の目的

一、女子教育上の大方針。今日も尚一定せざるが如し。益軒先生の女大學全く棄つべきか。福澤氏の新女大學全く今日に適するか。或は又他に適當なる女徳の標準あらざるか。本紙はまづ之を研究せんとす。

名家の女子教育談

西村茂樹氏

向島の葉櫻のかけを通り過ぎて、百花園の横道へ入る左側に、いとも清麗なる黒門あり。これなん現今道徳界の維持者たる西村茂樹先生の寓居なる客室に導かれて待の間。室内の裝飾を見渡すに、床には洞白麩の三幅對かけられたり。書ははのり、明石浦の九にて、中は丸、右左は波路島と四國の島なり。前には唐金の大きな香爐を中にして、右に七寶燒の花瓶、左に支那人の古像を置かれ、柱には久具正典と今一人の短冊掛けり。床の側を除きて、三方には各一面の額を掲げたり。一つは三條實美公の筆にて、求諸己の三字、一つは仁勇藤の三字なり。筆者は藤田東湖、今一つは探幽の山水畫なり。

謹告

左記の諸君は本紙發行につき賛成の意を表せられたり謹んで其厚意を謝す

(次第不順)

近衛 篤磨君 西川潤治郎君

板 新次君 高橋 秀夫君 元良勇治郎君

萩野 由之君 大和田建樹君 野口 侯興君

中川 鳳明君 宮地 義夫君 吉村 寅太郎君

伊藤 貞勝君 根本 善治君 下田 歌子君

棚橋 綱子君 中島 歌子君 三浦 眞佐子君

●「婦女新聞」に寄せる言葉

吉岡 彌生

我等の最愛なる婦女新聞は、遂に本號限り廃刊するの已むなきに至つたのである。我が婦人界のために、將又我が女子教育界のために、甚だ惜しい事だと思ふと同時に、明治廿三年以來四十二年間の長きに亘り育て上げた本誌と離別せざるを得なかつた福島氏の心事に想到すれば、本誌二月第一週號の、「本誌自爆の理由」と題する巻頭頁中「萬感胸迫つて心緒糸の如く亂れる」と言つて居られるのもさこそ察せられ、誠に、同情の念に堪へない。願ふに我が國婦人が、其の智識に於て、其の境遇に於て、其の傳統に於て、其他有らゆる點に於て、男子のそれに比し極めて水準の低かつたものを、兎も角今日の所までも引き上げることを得たのは素より時代の然らしむる所とは昔へ、一面に於て、時代に阿らず、情勢に媚びず、常に穩健中正の態度を堅持し、皇國独自の婦徳の涵養に努力精進せる本誌婦女新聞の存在に負ふ所甚だ大なるもの、ある事を私共は忘れなくてはならない。單にそののみならず、廣い意味に於ける我が女子教育の上及びした本誌の功も、亦決して抄くないと思ふ。而かも今日の福島氏としては剛

●本月中發行期日 第二號(廿一日月曜) 第三號(廿八日月曜)

●定價 一部金銀錢子 郵稅五厘 共六拾五錢 共壹圓貳拾錢

として婦人参政権運動に発展、拡大して行く。それに付随して母性保護運動が抬頭するが、母性保護は婦人新聞社が疾くから主張し組織化を計って来たところである。この期間は日本の婦人運動の組織と展開の重要

永原和子 従来の女性史研究に欠落した事実の集積

戦前の女子教育や婦人会の歴史を知るために私はしばしば『婦女新聞』を利用する。『婦女新聞』は発刊当初の明治三十年代から毎号のように各地の女学校の紹介や鳩山春子・棚橋絢子・成瀬仁蔵などの教育家の訪問記をせて女子教育の実態や教育家たちの個性までも具体的に伝えている。大正期にはいると社説で『女子教育革新論』を十回にわたって連載し、非実用的、画一的な女学校教育を批判して、男性に依存しない女性としての教育、あらゆる職業の基礎となる教育をという明確な主張となってくる。そして大正デモクラシーの中で女子の高等教育促進の署名運動を精力的に展開するようになる。このことは従来女性史の年表や概説書にも取り上げられていない事実である。

婦人会の運動についても『婦女新聞』は多くのことを

な時期であり、それらの事実が数十年に至って収録されていることはまことに得がたい。今回、その全容が復刊されるといふ。研究者にとってこの上なくありがたい事である。

私たちに教えてくれる。愛国婦人会のような大組織の中央、地方での活動ばかりでなく全国の村の婦人会、処女会の調査などはこの分野の研究に貴重な手がかりを提供している。これらはほんの一例にすぎないが、このように『婦女新聞』は小さな記事の一つまでが興味深い記録であるばかりでなくその主張は女性の着実な前進へのはげましで貫かれていて、福島四郎という人物への関心をもそそられる。

これまで私たちは『婦女新聞』を読むために国会図書館など、限られた図書館で、黄ばんで今にも破れそうなペー지를くねばならなかった。『婦女新聞』の復刻の実現は女性史研究者にとって何よりの朗報であり、これによって戦前の女性の、生活とたたかひの歴史はいっそうゆたかに、いきいきとしたものとなるであろう。

羽仁説子 若い人々に読んで欲しい

すばらしい意味をもった復刻版です。

婦人問題の原始林にふみこむようにたのしく、教えられること、魅力にみちた発見あり、婦人読本を読む

ようです。こうした優れた婦人週刊新聞が、日本の男性によって創られていたことは、誇ることのできる歴史だともいえます。



↑福島四郎(69歳と妻貞子(61歳))『婦女新聞』復刊記念に撮った写真

↑はにせつこ『評論家』(88年1月死去)

↑ながはら、かずこ『女性史研究家』

いらるゝ所極めて乏しい。此の點に付私共は本誌の終焉を見て對岸の火災視するが如き態度は許されないのでありますまいか。

○ 高島 米峰

婦人新聞が、日本の新婦道及び、女性文化に貢献したことの大なること、一々挙ぐることは出来ません。誠によく戦つて下さいました、私は、戦ひ勝つた凱旋將軍を迎へる氣持で、婦人新聞の最期を送ります。

明日の婦人界は『婦女新聞』の如き、聰明で愛情に富んだ指導者をつつては、「自今以後、誰をか恃まんや」の、歎少からざるを得ないでせう。

○ 高群 逸枝

婦人新聞の廢刊を知つたすべての全國有識婦人は、一様に強い衝撃を受けたことであらう。私もまさしくその一人である。私は小著『女性二千六百年史』の中に、この新聞の寄與について次のやうにいづつてゐる。すなはち「これは新聞としての効用を富面的に果してゐる外に、すでにわが婦人史にとつて、明治中期以後の第一資料を提供してゐる。」と。言葉は短いが私の意は盡してゐる。いま廢刊すれば、富面的には婦人界は唯一の高度文化の啓培乃至報道機關を失ふことになり、それは同時に文献資料の斷絶である。心から惜しまずにはゐられない。

○ 河井 醉茗

始あるものは終あり。婦人新聞四十二年の功果は絶大なものがあつたらうと存じます。人としたなら、天壽を完ふしたのと同じことで、つゝしんで婦人新聞の終刊に惜別の意を表します

○ 嶋中 雄作

過去に於ける婦人新聞の功績は巖本善治氏の女學雜誌の功績に匹敵する。而して、現存の他のいかなる婦人雜誌にも優つて偉大である。見よ、四十二年も續いた婦人雜誌が他に在るか？ 而もその當時經營最も困難とされた週刊雜誌にして而も尙終始福島社長の直宰で、毎號毎號文字通り心血を注いで我國婦人の穩健中正の指導を施して来た雜誌などあるものではない。他の總ての雜誌が減びても、婦人新聞だけは過去の功績に免じて生き延びるであらうと思つてゐたのに。又生き延ばさしめねばならぬ筈なのに。あゝ。

○ 大瀧 英子

「時代の大浪を乗切るだけの總力足らず……自爆する」といふ廢刊の辭！婦人同志會新報が合同となつてよることだのも東の間でした。婦人界をリードして来た四十二年間の婦人新聞の足跡は、ここで自爆しても、わが婦人文化史に燦としてゐます。全女性はいま婦人新聞をうしなふ淋しさに、深い感謝を捧げて見送らねばならないのだと

かたちのうへの婦人解放のみがすすみ、いまだに、さまざまの差別のなかにおかれてる現在の婦人問題、家庭問題、教育問題を考えると教えられることが多く、ぜひ若い人たちにも読んで欲しい。良夫賢父礼讃とか、婦人の地位向上を阻害する女子教育とか鋭く、日本の朝鮮属国扱いをしている軍国主義や宮城前風景をなげなくかかげたり、先見の明。

会時評をかかせていただくようになる。ところが、ここでとりあげた三つの事件、昨日の事件ともいえるありさま、いまだ市民の生活の幸福はすすんでいないことをしじみと考えさせられました。まあ読んでみて欲しい。

やがて戦争準備時代が来る。統制がはじまり、昭和十七年、福島夫人が「とうせいによってわが婦人新聞二一七四号を最後の息吹きとして自らその命を断つ」とかかれることになる。私は『婦人之友』をかかえて、統制のなかでもまれていた。あの戦争末期の弾圧のころをおもひ出す。

原ひろ子

女性学・文化人類学等々にわたる貴重資料

大正十四年六月七日号は、結婚問題号となっております。

「進歩せぬ男子の婦人観」という社説を福島四郎は書いて

↑はらひろこ『お茶の水女子大学教授／文化人類学』

ている。すなわち、「……多くの男子は社会を男子本位のものと考へ、家庭を男子の為に存在するものと思ひ、従つて女子の人格を認めず……」とし、「大多数の男子の婦人観が改まらなければ、あらゆる家庭問題も、性に關係する社会問題も解決の曙光を認めることは出来ない。……我らは時代錯誤の婦人観を抱いて妻を困しめて、同時に家庭生活を不幸ならしめている若い男子を咎める前に、先づ今日の男子の学校教育の欠陥について考へなければならぬことを思ふ。」と論を結んでゐる。家庭は男女で共に運営すべきものであるから、家庭科を女子のみの必修にするのではなく、男女共通の必修科目として、生活全般を考えていこうとする今日

福島杉夫

父「福島四郎」と「婦女新聞」

一九四二年(昭和十七年)二月、婦女新聞を廃刊した父福島四郎が最も心を痛めたのは、バックナンバーの保存をどうするかということでした。対米英開戦の翌年で、日本本土の空襲はこの時期にはまだありませんでしたけれども、戦争が長期化することは避けられな

の主張につながる視座を福島四郎はもっていた。社会のあるべき姿を考える時、男女両性が問題を出し合い、解決策を考え合うことが、肝要必須だと私は信じる。四十年余にわたる『週刊婦女新聞』において、福島夫妻の編集方針は常に男女の執筆者を揃え、読者も女性に偏つてはいなかった。本新聞には女性学、近現代史にとどまらず、文化人類学、社会学、生活学、家政学、マスコミ論等多岐の分野にわたる貴重な資料がもりこまれており、文献として重要である。さらに本書は万人が一生に一度ひもとくべき生活の書として広く推薦したい。

↑ふくしま・すまお 青山学院大学名誉教授
福島四郎三男

小山 たき

静かに大きい時代の波をみつめて自分に首ひきかせて居ります。先づ一安心と思ふ間もなく、電撃的の廢刊と承り不滅の光を失つた思でございます。しかし人も我も愛惜断ちがたきところ断然自爆の舉に出でられた社長福島様に、切なる御同情と大なる賛意とを表します。婦女新聞の今日迄の偉大なる功績は、優に将来の指導力をも有するものと信じます。たい感謝の外は御座りません。何卒此際何等かの方法によりまして多くの有志の方々が一緒になつて福島社長に微意を表する企てのあるべき事を懇願致します。

永井柳太郎

多半年日本婦人の向上に貢献せられたるを感謝します。婦女新聞が日本婦人に植付けたる精神は滅せず。婦女新聞滅するも精神は、日本婦人の中に在りて成長すべし。明日の婦人会に對する念願としては大東亞を指導するに足る婦人であれ。

生田 花世

「婦女新聞」の廢刊は驚きました。しばし寂しさに打たれたのですが、同時にいさぎよいといふ感じを受けました。「終よきものはもつともよし」

『婦女新聞』復刻版の刊行 書評抄録

「婦女新聞」復刻版を読む

湯沢 雍彦

明治三十三年といえは、明治政府最大の懸案であつた条約改正問題がどうやら落着いた時期である。中江兆民が「一読大笑するのみ」と評したという大日本帝國憲法も制定後十年を経て、社会に定着しつつあつた。婦人の政治活動を禁止した「治安警察法」が再公布されたのも明治三十三年である。大逆事件がおこるまでにはまだ十年ある。つまりこの時代は維新以来の社会的動揺が明治政府の意向に沿つて收拾され、一応の安定をみた時期といつてよいであろう。週刊「婦女新聞」はこの明治三十三年に皇太子の結婚を記念して発行されはじめた。主宰の福島四郎は、姉の不幸な結婚をみて義憤を感じ、婦人問題に深い関心を持つようになったことから、新聞の発行を思い立つたという。この発行の動機と時期はこの新聞の性質を長く規定していくことになる。資料として第一級の価値を持ちながら現存するものがきわめて少なく、研究対象となる機会がほとんどなかった「婦女新聞」の完全な復刻版が不二出版から刊行されこれになった。この新聞は昭和十七年まで四十二年間にわたつて続いたのでその量は膨大なものになる。

第一巻から第六巻まで目を通ず機会に恵まれたが、内容は予想にたがわず誠に興味深いものであつた。多くの記事は断片的でもあり、思想性を持つものばかりではない。それだからこそかもしれないが、読んでみると、この時代(明治三十三年から三十八年)の女性をとりまく世界の雰囲気や紙面全体から立ち昇つてくるように思われる。例えば不婚論や首務問題(務の着用の適合の問題)の論争、女学校・婦人会便り、著名人の訪問記事、文芸欄、料理・育児・衛生などに関する実用記事、貴族・皇族の動勢情報などから当時の女性達の生き方・感じ方が伝わってくるのである。「婦女新聞」は思想的にかたよりがなかつたために、長期にわたつて存続が可能であつたといわれている。しかし無思想であつたのではないことは、男女の人格的対等、職業及び政治・経済上の機会均等の主張が、この新聞の三大綱領の一つに掲げられていたことから十分うかがえるのである。母性保護についても、「婦女新聞」に早くからとりあげられており、それが出発点となつて母性保護法制定の運動が生まれたことは知る人ぞ知るところである。婦人参政権問題、公娼廃止問題なども紙上で追求された。中でも私達的心に残るのは、「婦人は先天的に平和主義者であり、戦争反対論者である」という立場から平和問題にも熱意をそそいだ「婦女新聞」が、結局は戦争の犠牲となつて廢刊に追い込まれたという事実である。ペンには剣よりも強しと言われるが、本当

価値ある婦人史料の復刻

最近の某古書目録に、「福島四郎」婦人界三十五年「七万円」とあつた。文芸書以外の単行本としては最高の値であろう。中身は福島が主宰した「婦女新聞」の論説集成だが、新聞自体がまた珍しい。一九〇〇年から一九四二年まで続いたこの週刊紙が揃つているところはどこにもない。それが、このたび不二出版から完備いで復刻され始めた。この新聞は、最近上昇機運にある日本女性史研究の分野でもあまり利用されていない。世評の高い『日本婦人問題資料集成』(ドメス出版)の中にも、この新聞からの引用はないように見受けられる。珍資料すなわち学問的価値ある資料とはいへぬことはもちろんだが、この新聞ほど価値が長年無視されてきた資料は珍しい。鳩山春子とか吉岡弥生など女流名士の支持を受け、地域の婦人会・処女会のメンバーや女教員を讀者としていたから、何となく体制的、通俗的なものと勘ちがいされてきたのでは

(本稿の執筆には、女性史研究家の野崎衣枝子氏のご協力をいただいた。)
(ゆざわ・やすひこ氏「お茶の水女子大学教授・社会学専攻」)
(週刊読書人'83年6月6日号)
なからうか。廢刊を惜しんだ高群逸枝は、さすがに本紙をもつて婦人会「唯一の高度文化の啓培乃至報道機関」で、婦人史にとつての「第一資料」と評している。筆者は「婦人界三十五年」を読んでおどろいた。そこに平明な筆で展開されている公娼廃止・母性保護・婦人参政権・高等教育機関の婦人への開放などの諸主張は、大正デモクラシー期の婦人の基本的要求として、平塚らいてう、市川房枝ら高名な運動家により華々しく高唱されたものと同質ではないか。こういふ新聞が四〇年以上もひろい範囲で読みつがれてきた事実、今日のわれわれの想像以上に戦前の婦人の知的レベルが高く、敗戦後の急速な婦人の政治的・社会的進出の基盤を築いていたことを推測させる。論説以外の報道記事からも、さまざまの新知見が得られることであろう。(M)

(朝日ジャーナル'83年2月11日号)

松尾尊允

近代女性史研究の「第一資料」

福島四郎の週刊『婦女新聞』は今日では忘れ去られた存在である。近代日本のジャーナリズムについての重要な辞典でもある『日本近代文学大事典』講談社さえ一行の説明もない。女性史研究者と称される人たちの中でも本誌を無視している人が存外多いのだ。おそらく、女流名士の後援を受け、女教員、地域婦人団体のリーダーなどに読者が多かった一見通俗的、保守的なこの新聞などは、青鞥社や社会主義婦人組織のごとき突出した部分に眼を奪われがちな研究者の視野に入らなかったのであろう。

しかし、この新聞は一九〇〇年創刊より一九四二年廃刊まで、「男女が人格的に対等である意義を明らかにし、女子の能力を自由に發揮せしめるため、教育職業及政治経済上の機会均等を主張する」（本誌の三大綱領）趣旨をつらぬき、公娼廃止、母性保護、婦人参政、高等教育機関の開放など、戦前婦人の市民的要求

丸岡秀子

『婦女新聞』復刻刊行——成功を心から祈る

貴重な資料の復刻版による活性化は、各方面でおこなわれている。これは、高度文化社会の為すべき義務の一面だと思う。

市川房枝さんはじめ、わたしたちの間で実施された『日本婦人問題資料集成』も、女性史に新しい礎石を築くことをめざしただけでなく、埋もれた史的資料もで

をねばりつよく、平明な筆致で訴えつづけた。この種の新聞が婦人中堅層に根を下ろしていた事実は、戦前日本における市民的自由要求の意外な定着度を示すものではないか。

執筆者は明治期だけみても、鳩山春子・安井哲子・三輪田元道ら婦人界の名士のほか、平凡社の創立者下中弥三郎、社会主義運動のリーダー安部磯雄・島中雄三、民主主義の鼓吹者茅原華山・永井柳太郎ら多彩であり、記事も婦人界・女子教育界の動向を克明につたえる。高群逸枝が本誌をもって「婦人界唯一の高度文化の啓蒙乃至報道機関」であり、「わが婦人史にとって明治中期以後の第一資料」と評したのは不当ではない。昭和十七年廃刊以後、地下に眠った状態だったこの新聞が、福島家旧蔵の原本から完全復刻されることは、復刻ばやりの出版界において特筆すべき快挙であり、ひろく近代史研究者にとっての近來の福音である。

きるだけ発掘し、集成することによって、この一面の義務にこたえることを願った。

このたび『婦女新聞』は、この復刻版による活性化の一角に輝やかしい歴史として配置されることになった。この新聞は、東京大学明治文庫、国会図書館でさえ部分的にしか保存されていず、「黄ばんだ、いまにも破

ったかもしれない。

不二出版が、諸困難を排して、その復刻にふみきられたことに感謝し、研究者だけでなく、出来るだけ多くの人びとの手に渡るよう、その成功を祈るばかりである。

村上信彦

女性史に巨大な足跡を残した福島四郎の遺産

『婦女新聞』は福島四郎が姉の悲惨な結婚に義憤をかんじ、世の女の不幸を救うために出版を思い立ったのだが、そのヒューマンな情熱はこんにち女性史に巨大な足跡を残すことになった。婦人啓蒙といえど本善治の『女学雑誌』が第一にあげられるが、それは明治の

一時期、『婦女新聞』は明治大正昭和の三代にわたっている。しかも扱う問題ははるかに現実的で、教育・家庭・結婚・職業・売淫その他一般社会問題におよび、すべて女の立場から徹底的、具体的に論じて論旨は明確、批判は痛烈、当時の社会に並々ならぬ影響をあた

えた。現在、その資料的価値ははかり知れぬものとなっている。

ところが、これほど貴重な文献がこれまでほとんど世に知られていないのは、入手が絶対的に不可能だったからである。これを世に出す道は復刻しかない。だがそれがいかに困難かを私は知っていた。だからそれが実現すると知ったときのよろこびは筆舌に尽せない。これを機に、この得難い歴史的資料が研究者の手に届くことを心から祈る次第である。

↑まつおかよし——京都大学教授／近代史

といふ詞があります。私は婦女新聞のよき終りをたゝへたいとおもひます。同時に萬年埋れた寶も亦芽を出すといふ事を考へます。本紙の永生は形にはよりませう。

○ 神近 市子

長い間御苦勞様で御さいました。一年長の方がなくなるについで口に出る言葉が今口にのぼりました。意義ある多年の苦勞を経て、すべてはよかれと生を終る時にこれ以上言へることもなく、また自分も首つて貰ひたくもありません。ほんとに御苦勞様でした。御苦勞はあとの人達が決して無駄にはしないでせう。これが人生で御さいます



○ 三輪田元道

四十年まり茂りし文の林をばきりすてさする世を嘆くわれたゝへ言書かむと思ひて筆とれどかく氣になれず又筆を捨て

○ 久布白落實

忠實にして公正なる報道機関であつた。また婦女子の最もよき友であり、指導者であつた。よい言葉を残して下された。櫻

花の如くちれよ。

○ 川上 彰愛

創刊以來四十二年の御奮闘、俗流に媚びず、毀譽の外に立ち正義を生命として、毅然たる歩武を進めて來られたそれが今、突如廢刊するといふ、一體それは何を語るものでせうか。日本の婦人界は木紙の如きものを、廢刊させてよいものでせうか。

○ 山高しげり

婦女新聞は何といつても徹頭徹尾福島社長のものでありました。それ故にこの言葉も結局福島社長に寄せる言葉になりました。昨日日婦の發會式に連り、又第一回の理事會にも出席しましたが、俤へ聞けば「出来上つた以上軍部は手を引く」さうです。御安心下さい。後はわれわれがお引き受けいたします。婦人界に殆んど一生をさへげつとして下さつた世方に對し、これからは私共がしつかりやつて喜んで頂ませう。

○ 小原 國芳

四十年間の御苦闘、たいへん感謝でございます。さゝやかな雑誌でも毎月の生みの苦しみを苦んでます関係上、永年の貴い御戦が聊かでも想像できますホントに御苦勞でした。快よくわれに働く仕事あれ」と歌つた啄木の心境が思ひやられます。

「うれしい事三年目で歌舞伎へ行かれると



「早く身じまひをしなさいとをが初まるも知れない



「ヤアアさいぞ夢中でイシヤをあげて居らア



↑創刊号に掲載された漫画

↑「むらかみのぶひこ」女性史研究者（'83年10月死去）

↑「まるおかひでこ」評論家

↑昭和十二年三月七日号より

〈*評論〉

Table of authors and titles for the 'Reviews' section, including entries like '純の話(附 熨斗)', '女子の感情教育', '金髪夫人の破鏡', etc.

●執筆索引

Table of authors and page numbers for the 'Index of Authors' section, listing names like 秋の人, 秋保安治, 秋間ため子, etc.

「婦人界35年」記事・執筆索引「刊行のご案内」

婦人界三十五年 福島四郎著

本書は、著者福島四郎が明治33年に創刊した『婦人新聞』の三五周年を記念して、新聞に掲載した評論の約三分の一を取ったものである。本書の序で、穂積重遠が「此書は明治大正昭和に互る我国婦人問題の記録」と言っているように、まさにかけがえのない歴史的証言の集積であり、それぞれの時代の問題意識が浮き彫りにされ、生きた歴史の教訓として今日にも役立つものである。

の崩壊を顧みないのでから辞職せよ」と痛烈に批判して、教育界に衝撃をあたえたことも有名である。『婦人新聞』のエッセンスであると共に、婦人問題の基本的資料として、広く活用されんことを願うものである。

体裁 A5判/上製/1,308ページ
付録 「過去三十五周年に於ける婦人新聞の業績」「三十五年昔語り」
(共に福島四郎著述)
定価 18,000円

『婦女新聞』記事・執筆索引

本書は、一九〇〇(明治33)年から四三年間にわたって刊行され続けた『婦女新聞』の主要記事索引及び主要執筆索引である。『婦女新聞』の特徴は、その男女平等を熱烈に説く姿勢と、教育、政治、社会、文化その他あらゆる分野における女性の動きを全国的規模で詳細に網羅した豊富な情報にあるが、本索引を編集するにあたっては、女性に関する記事を中心に置いて、論説、報道、感想、随筆、報告、学芸の分野に大きく分類

体裁 B5判/上製/650ページ
定価 28,000円

●福島四郎年譜

一八七四年二月二十八日 福島元嘉、てるの四男として兵庫東加東郡小野町に生まれる
一八八四年(11歳) 後年『婦女新聞』発行の因となった長姉マキ死去
一八八七年(14歳) 漢学者松岡約齋(民俗学者柳田国男氏の父君)の家塾に通い漢籍を学ぶ
一八九四年(21歳) 上京、国文学者大和田建樹の書生となり、東京専門学校(早稲田大学の前身)に通う
一八九九年(26歳) 埼玉県立第一中学校教員の時、福沢諭吉の『女大』学評論を読み、婦人問題に生涯を捧げる決意をする
一九〇〇年(27歳) 五月十日週刊『婦女新聞』第一号を発行
一九〇二年(29歳) 蜂屋貞子と結婚
一九三五年(62歳) 『婦女新聞』創刊三五周年を記念して、この間紙上に掲載した評論の約三分の一を選んだ『婦人界三十五年』を刊行
一九四二年(69歳) 戦時下、物心両面の圧迫に耐えかねて、週刊『婦女新聞』二一七四号をもって廃刊。最終号発行日二月一日は自己の命日であると言言
一九四五年(72歳) 二月一日、疎開先の神奈川県小田原市にて死去
一九七五年二月一日、『婦女新聞』および夫四郎の祥日命日に当たる日に妻貞子死去、享年94歳

『婦女新聞』〈復刻版〉全68巻・付録2冊 概要

体裁——B5・A5判／上製

総38、500ページ

付録——「婦人界三十五年」

『婦女新聞』記事・執筆者索引

配本——全11回配本

定価——揃1、000、000円

配本のご案内（1982年12月～1985年1月にて刊行済み）

第1期〔明治期Ⅰ〕	第1巻～第6巻	明治33年～38年	定価70、000円
第2期〔明治期Ⅱ〕	第7巻～第13巻	明治39年～45年	定価80、000円
第3期〔大正期Ⅰ〕	第14巻～第18巻	大正元年～5年	定価95、000円
第4期〔大正期Ⅱ〕	第19巻～第24巻	大正6年～9年	定価95、000円
第5期〔大正期Ⅲ〕	第25巻～第31巻	大正10年～12年	定価95、000円
第6期〔大正期Ⅳ〕	第32巻～第38巻	大正13年～15年	定価95、000円
第7期〔昭和期Ⅰ〕	第39巻～第44巻 +付録2冊	昭和2年～4年	定価98、000円
第8期〔昭和期Ⅱ〕	第45巻～第50巻	昭和5年～7年	定価93、000円
第9期〔昭和期Ⅲ〕	第51巻～第56巻	昭和8年～10年	定価93、000円
第10期〔昭和期Ⅳ〕	第57巻～第62巻	昭和11年～13年	定価93、000円
第11期〔昭和期Ⅴ〕	第63巻～第68巻	昭和14年～17年	定価93、000円

不二出版

東京都文京区向丘一丁目二
 TEL 〇三―八―二―四四三三
 FAX 〇三―八―二―四四六四
 振替 〇三―八―二―四四六四
 〇三―八―二―四四六四

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。